

## 第2章

### キャリア関連設問の分析と本学の就職動向

#### 1. キャリア関連の設問の分析（2・3・4年生対象）

令和元（2019）年度から、2・3年生には「あなたは、大学卒業後の進路について、現時点でどのような希望をもっていますか。あてはまるものを1つ選んでください。」として、また4年生には「卒業後の進路やこれまでの就職活動について、あてはまるものを1つ選んでください。」として、卒業後の進路についてどのように捉えているかを2・3年生と4年生に共通する項目で訊ねる設問を設けた。

本章においては、この設問について、学年間と、各学年における学部間の回答傾向の違いを検討していきたい。

#### 2. 学年間の回答傾向の違い

ここではまず、学年間の回答傾向の違いを検討する。それぞれ、2・3年生には将来的な進路の希望について、4年生に対しては卒業時点の実際の進路について訊ねていることに留意されたい。

図 2-1

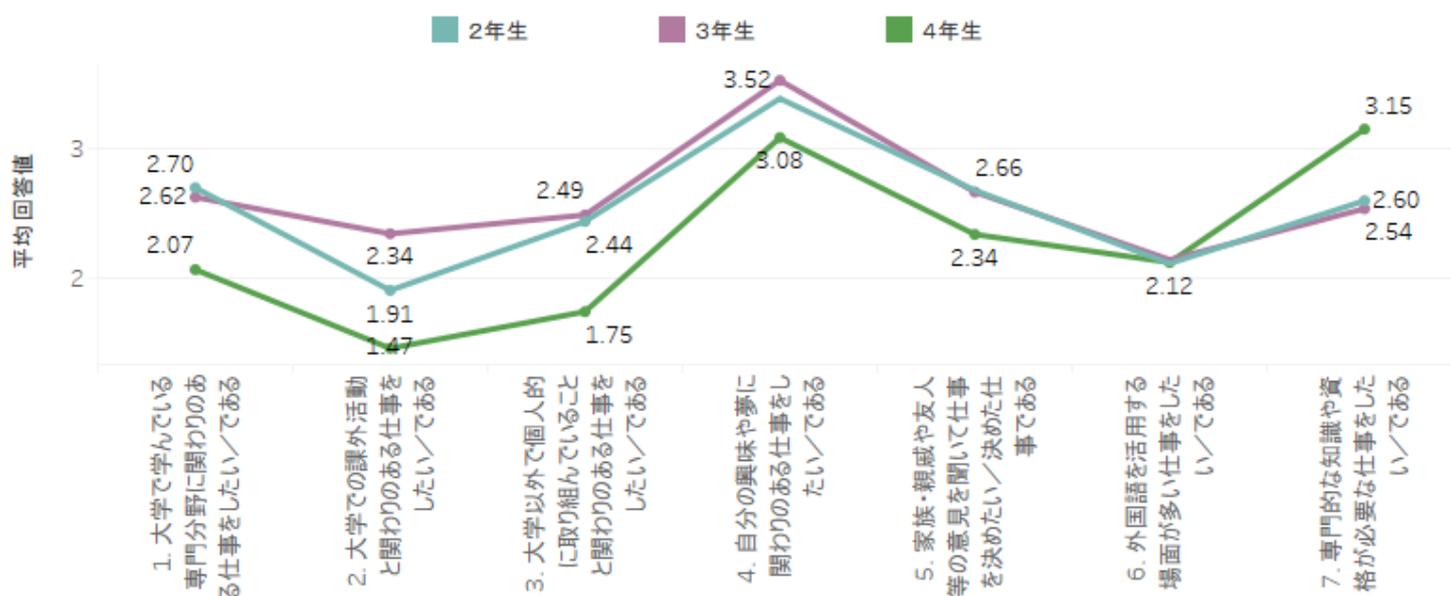


表 2-1

項目	学年間の差
1. 大学で学んでいる専門分野に関わりのある仕事をしたい／である	2年生・3年生 > 4年生
2. 大学での課外活動と関わりのある仕事をしたい／である	3年生 > 2年生 > 4年生
3. 大学以外で個人的に取り組んでいることと関わりのある仕事をしたい／である	2年生・3年生 > 4年生
4. 自分の興味や夢に関わりのある仕事をしたい／である	2年生・3年生 > 4年生
5. 家族・親戚や友人等の意見を聞いて仕事を決めたい／決めた仕事である	2年生・3年生 > 4年生
6. 外国語を活用する場面が多い仕事をしたい／である	-
7. 専門的な知識や資格が必要な仕事をしたい／である	4年生 > 2年生・3年生

図 2-1 は、各学年の項目別の回答平均値を示している。また、表 2-1 は、各項目の平均値を学年間で比較した場合に、差が検出された箇所について表現している。

これらを見ると、まず、6.「外国語を活用する場面が多い仕事をしたい／である」では学年間の差がみられなかったことが分かる。したがって、2・3年生が希望する進路と、4年生の実際の進路について、外国語の活用に関しては回答傾向に違いがなかったといえる。

2年生と3年生を比較する視点では、違いがみられたのは2のみであり、3年生の平均値が高かった。この点については、3年生の方が課外活動の経験年数が長いことに加え、3年生にとっては課外活動での取り組みが間近に控える就職活動でアピールしたい内容である場合も想定され、これらの影響が考えられるだろう。2を除いては、2・3年生は進路の希望としては似た傾向を持っているといえる。

2・3年生と4年生を比較する視点では、1.「大学で学んでいる専門分野に関わりのある仕事をしたい／である」、2.「大学での課外活動に関わりのある仕事をしたい／である」、3.「大学以外で個人的に取り組んでいることに関わりのある仕事をしたい／である」、4.「自分の興味や夢に関わりのある仕事をしたい／である」、5.「家族・親戚や友人等の意見を聞いて仕事を決めたい／決めた仕事である」では、2・3年生の平均値が4年生よりも高い。逆に、7.「専門的な知識や資格が必要な仕事をしたい／である」では4年生の平均値の方が高かった。

このことから、大学で学んでいる専門分野や大学内外での活動、自分の興味や夢、身近な存在の意見、といった個々人の活動や志向については、4年生が感じる実際の進路との関わりは2・3年生の現時点での希望ほど高くなく、反対に専門的な知識や資格の要求度合いは、2・3年生が考えるよりも4年生では高く感じられていることが分かる。2・3年生が就職活動前に考えていた大学生活での各種の学びと将来の仕事の関わりは、実際に進路が決定した4年生にとってはより薄くなり、仕事としてはまた別の専門性が求められるという、現代の就職活動の前後の状態を表しているようにも思われる。

### 3. 各学年における学部間の回答傾向の違い

次に、同じ設問について、各学年における学部間の違いを検討する。

図 3-1

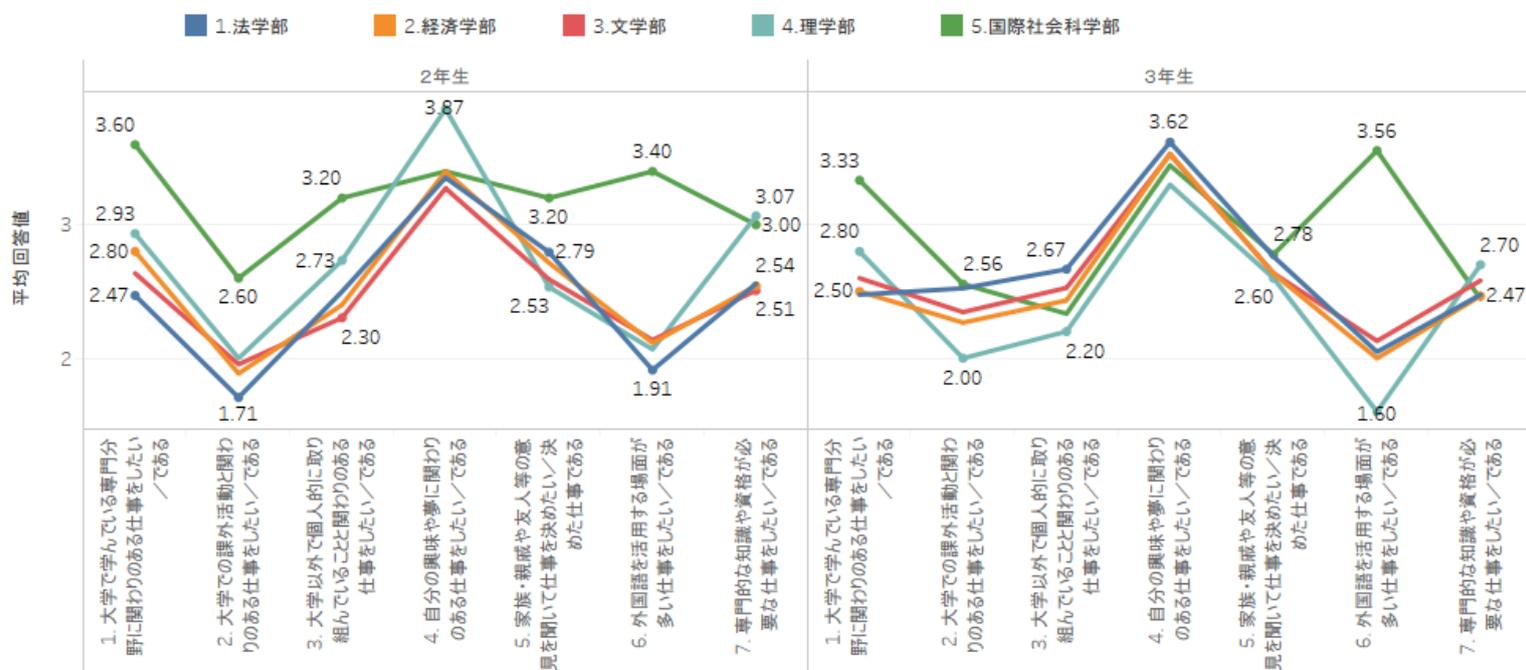


表 3-1

項目	2年生学部間	3年生学部間
1. 大学で学んでいる専門分野に関わりのある仕事をしたい	-	-
2. 大学での課外活動と関わりのある仕事をしたい	-	-
3. 大学以外で個人的に取り組んでいることと関わりのある仕事をしたい	-	-
4. 自分の興味や夢に関わりのある仕事をしたい	理 > 法・経・文	-
5. 家族・親戚や友人等の意見を聞いて仕事を決めたい	-	-
6. 外国語を活用する場面が多い仕事をしたい	-	国社 > 法・経・文・理
7. 専門的な知識や資格が必要な仕事をしたい	-	-

まず、2・3年生について検討する。

図 3-1 は、両学年について、各学部の項目別の回答平均値を示している（左が2年生、右が3年生である）。また、表 3-1 は、学年別に各項目の平均値を学部間比較した場合に、差が検出された箇所について表現している。これらを見ると、多くの項目で、学部間の違いはみられなかったことが分かる。

2年生で学部間の違いがみられた項目は、4.「自分の興味や夢に関わりのある仕事をしたい」であり、理学部の学生が特に高く回答した結果であった。4.は全ての学部で平均値が3.0を超えており、自分の興味や夢に関わりのある仕事をしたいと思う学生は総じて多いが、理学部では特に多かったことがうかがえる。

3年生では、6.「外国語を活用する場面が多い仕事をしたい」で、国際社会科学部の学生が特に高く回答した結果であった。6.は国際社会科学部の平均値は3.56であり強い希望があるといえるが、その他の学部の平均値は2.0前後であり希望する学生が少ない。国際社会科学部で、英語による講義などを通じて大学時代に培った語学力を活用したいと思う学生が多いことが確認できた。

図 3-2

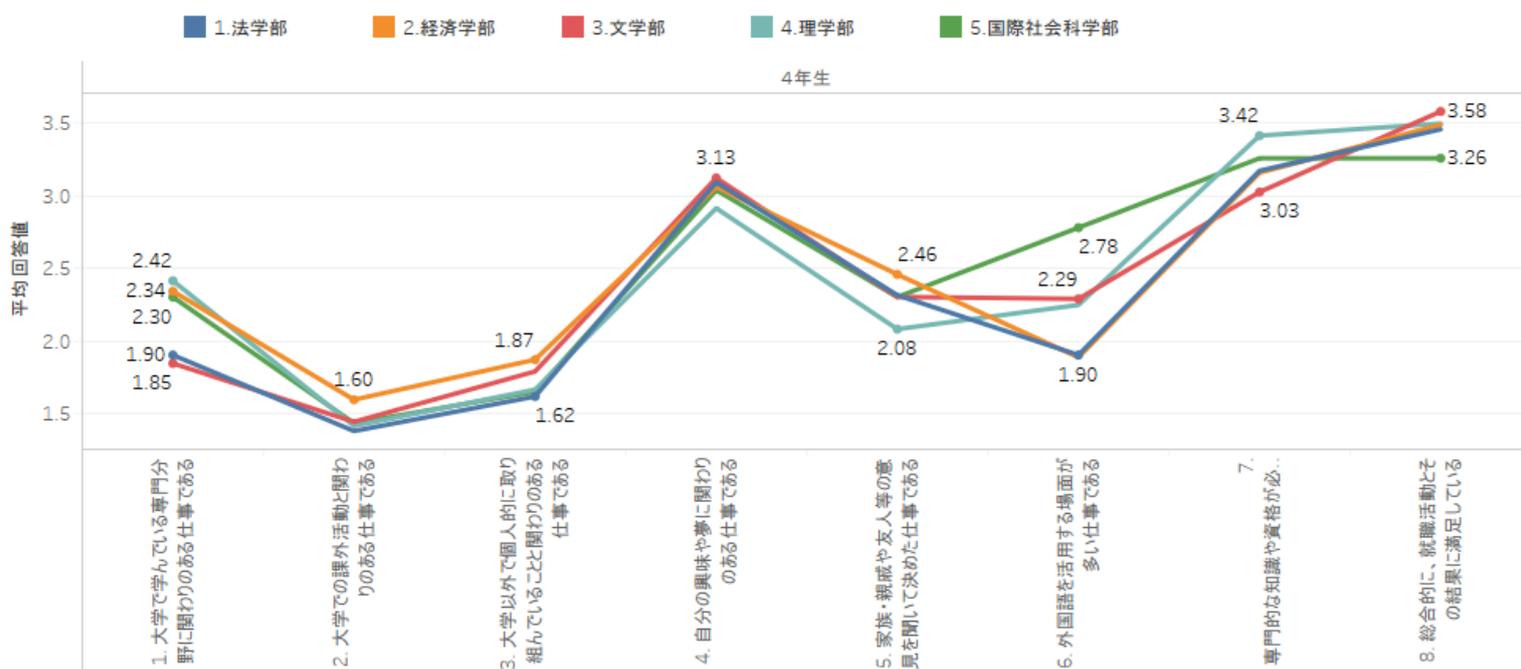


表 3-2

項目	4年生学部間
1. 大学で学んでいる専門分野に関わりのある仕事である	—
2. 大学での課外活動と関わりのある仕事である	—
3. 大学以外で個人的に取り組んでいることに関わりのある仕事である	—
4. 自分の興味や夢に関わりのある仕事である	—
5. 家族・親戚や友人等の意見を聞いて決めた仕事である	—
6. 外国語を活用する場面が多い仕事である	国社 > 法・経
7. 専門的な知識や資格が必要な仕事である	—
8. 総合的に、就職活動とその結果に満足している	—

次に4年生について検討する。

図 3-2 は、4年生の各学部の項目別の回答平均値を示している。また、表 3-2 は、各項目の平均値を学部間比較した場合に、差が検出された箇所について表現している。多くの項目で、学部間の違いがみられなかった。また、4年生だけに訊ねている 8.「総合的に、

就職活動とその結果に満足している」は学部による違いはみられず、平均値も 3.0 を超えていることから、本調査に回答した 4 年生は就職活動全般に満足して卒業した学生であることがうかがえる。

4 年生で学部間の違いがみられた項目は 6. 「外国語を活用する場面が多い仕事である」であり、国際社会科学部が法学部・経済学部よりも平均値が高かった。したがって、国際社会科学部は、外国語を活用する場面の多い仕事に就いた学生が比較的多かったといえる。これは 3 年生と同様の傾向を示すものであり、現実には大学時代に培った語学力を活かして就職したことがうかがえる。

#### 4. 分析結果のまとめと就職動向との関連

以上、学年間と、学年別の学部間の違いについて検討してきた。

学年間の比較では、2・3年生が希望する進路と大学での専門分野やその他の活動等との関わりより、進路が決定した4年生が感じるそれらの関わりは低い傾向があった。反対に4年生は、2・3年生が希望している以上に専門的な知識や資格が求められる仕事に就いたと答える傾向があった。

4年生の進路について、興味や夢との関わりや、専門的な知識や資格が必要となる傾向は回答平均値が3.0を超えており、比較的高い値であった。また、本学における実際の進路に関する学部間の違いは、主として国際社会科学部の学生が語学力を活かした仕事をしたいと考え、実際にそのような仕事に就いていた点で、これ以外には学部による違いはみられなかった。全体的に、回答者は就職活動とその結果については満足して卒業していた。

これらの回答結果と実際の進路とを合わせて検討するために、全学の就職動向についてみてみよう（以降の図4-1～図4-3は、学校基本調査への本学回答に基づく）。

図4-1

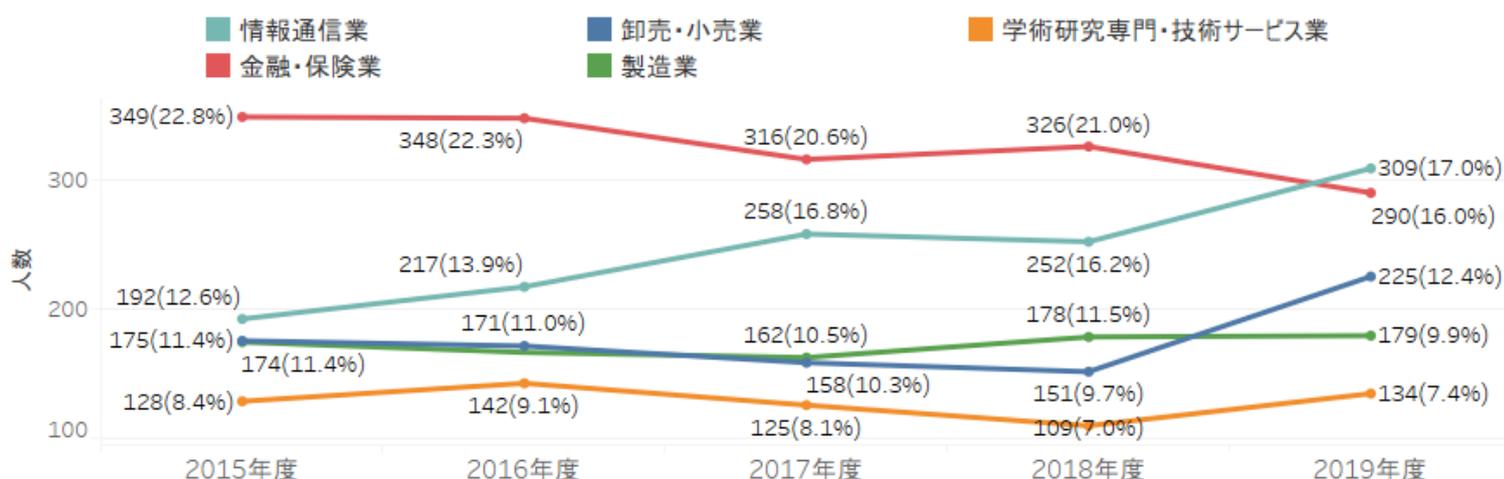


図4-1は、令和元（2019）年度の本学における産業別就職者数の上位5種について、経年の推移をみたものである（グラフ内の数値は人数、（ ）内は年度別の全体人数に対する割合を示す）。

これをみると、平成30（2018）年度まで人数割合の最も多かった「金融・保険業」は就職者数が徐々に減り、2019年度にはそれまで2番目に多かった「情報通信業」が最も多くなっている。また、「卸売・小売業」は2019年度で人数割合が増えており、「製造業」や「学術研究専門・技術サービス業」はこの5年間は横ばいである。

この2019年度にみられる変化については、国際社会科学部が卒業生を輩出するようになったことが一つの要因として考えられるものの、それ以前から「情報通信業」への就職者数は緩やかに伸びてきており、本学の全体的な就職動向の変化と見受けられる。昨今の情報技術関連の発展を考えれば、今後も情報通信業を中心とした就職動向の変化が続くことは想像に難くない。

図 4-2

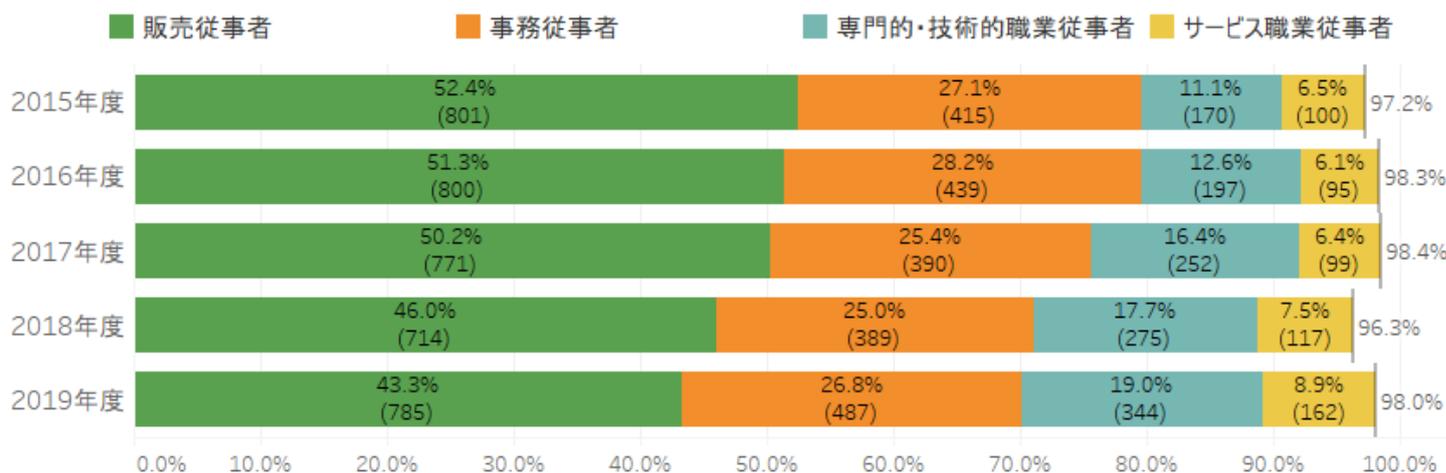


図 4-2 は、本学における職業別就職者数のうち、各年度で合計の割合が 95%以上を占める上位 4 つの職種について、経年の割合をみたものである。これをみると、平成 27 (2015) 年度に半数以上を占めていた「販売従事者」は減少傾向にあり、「専門的・技術的職業従事者」は増加傾向にあることがわかる。

図 4-3

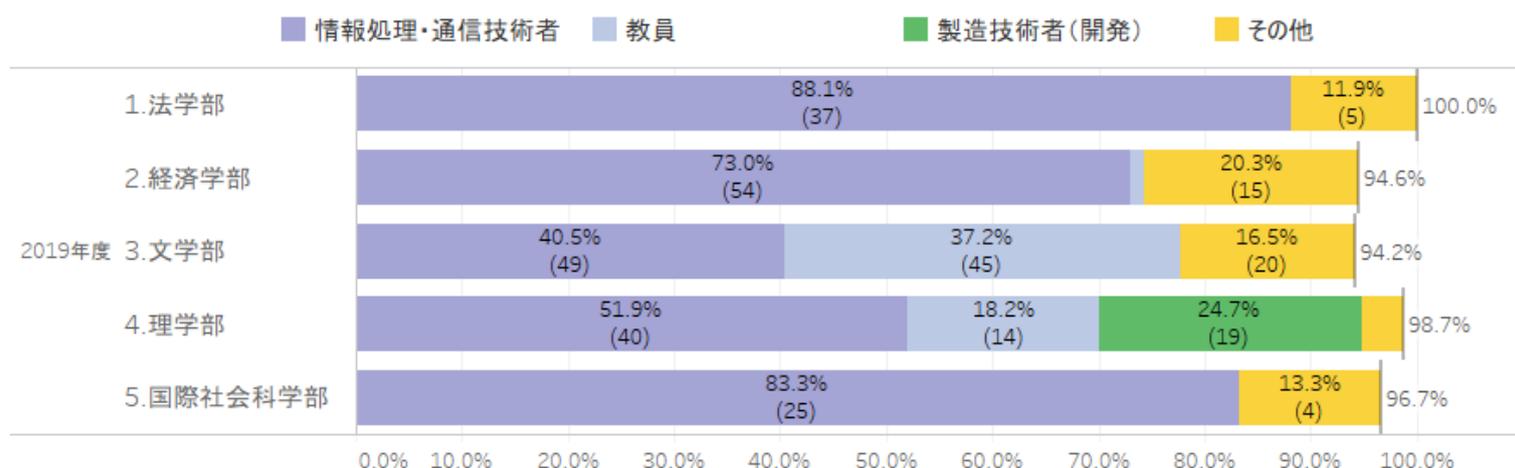


図 4-3 は、図 4-2 で増加傾向にあった「専門的・技術的職業従事者」の下位分類について、いずれかの学部で 5 %以上の卒業生がいた分類に絞って 2019 年度の学部別に占める

割合をみたものである。これによると、法学部・経済学部・国際社会科学部では、そのほとんどが「情報処理・通信技術者」である。文学部には「教員」が、理学部には「教員」と「製造技術者(開発)」が一定数含まれることは各学部の特性から頷けるが、両学部とも最も多いものは「情報処理・通信技術者」である。全ての学部で「専門的・技術的職業従事者」というと「情報処理・通信技術者」が多くを占めることが分かる。

以上のことから、産業別にみると情報通信業への、職種別にみると専門的・技術的職業への就職者数が伸びており、専門的・技術的職業といった場合、多くは情報処理・通信技術者であった。本学における学部卒業後の就職者は、徐々に情報通信分野や、情報処理・通信技術を扱う仕事に就く者が増えているといえるだろう。

在学生調査への回答傾向と、就職動向を合わせて考えてみよう。

大学生活での学びと仕事の関わりは、2・3年生が希望する程度と比較すると、進路が決定した4年生にとってはより薄いものとなっており、また別の仕事上の専門性が求められるという調査結果であった。この点と、本学の卒業生の進路に従来販売従事者や事務従事者が多いことや、専門的・技術的職業従事者が年々増加していることを考え合わせると、本学の学位プログラムは必ずしもそれらの職種と直接の関連があるものではないため、大学で学んだ専門分野との関わりが薄くなることは頷ける。近年増加傾向にある情報処理・通信技術者、また、就職先の産業である情報通信業についても同様のことがいえる。本学において情報処理や通信技術に関してより専門的に学んでいる学生は、情報科目を自ら能動的に選択履修した学生に限られ、現状ではその割合は少ないと思われる。

このようなことから、新卒採用においては、例えば情報処理・通信技術に関することがらを専門的に学んでいなくても、専門的・技術的職業従事者として採用されうる現状がうかがえる一方、今後の社会変化の中でこれらの分野を身につけられる大学や課程・プログラムが増えれば、将来的に本学の就職動向も影響を受けることが想定できる。専門的・技術的職業従事者が一転して減少傾向に変わる可能性もあるが、大学への社会的要請として、興味関心に応じた主専攻を学びながら、情報処理・通信技術なども副専攻として学べる仕組みが一般的になり、大学での学びをこれまで以上に活かした就職活動が行われるようになる可能性も考えられる。

今後、本調査の回答結果や就職動向を引き続き確認していくことに加え、キャリアセンターが蓄積するより詳細なデータや知見の活用などから、学生の将来に向けたニーズを探っていく必要があるだろう。